

源氏物語における文使いについて

坪井暢子

これまで「源氏物語」の消息文について料紙や折枝との配色について考えてきた。消息文は言うまでもなく、発信者が、ある事柄を伝えるために贈るものである。しかし消息文に書かれている内容だけではなく、どんな料紙を使っているか、どんな枝に付けているか、いつ贈ってくるか、という様々な事象もあわせて、相手に伝えられることになる。つまりそれらの事象のひとつひとつが何らかの意味を持ち合わせている、ということである。同じように、消息文を持つてくる人、つまり文使いも意味を持たされている、ということが言える。

源氏物語では数々の消息文がかわされる。その消息文のやりとりには、文使い、あるいは取次をするものが重要な役割を果たしている。消息文が発信者から受信者の手に渡るまでに、例えば、発信者→側近のもの→受信者の女房→受信者という経路をたどる。例を挙げよう。野分巻、野分の翌朝、夕霧は二通の恋文を書いた。雲居雁の許へ一通、もう一通は惟光の娘の藤典侍の許へ贈ったものと思われる。夕霧はそれらを馬の助に渡した。

馬の助に賜へれば、をかしき童、またいと馴れたる御隨身などに、うちささめきて取らするを、若き人々、ただならずゆかしがる (四一四)²

とあるように、事情を知った側近の者が、直接行くのではなく、童や隨身といった者を相手の女のところへ行かせるのである。そして相手も童や隨身から直接受け取るのではなく、女房や、女童などに渡す。例えば橘姫巻で、薫は宇治の姫君に宛てて書いた消息文を、左近の将監を使にして、「かの老人(弁の尼)尋ねて、文も取らせよ」(六一二八)と命じている。

つまり消息文が届けられる段階には

*発信者から受け取るもの

*受信者のもとへ運ぶもの

*それを受け取るもの

*受信者へ手渡すもの

がある。「文使い」という場合、どの段階のものを言うかも問題となるが、今回は消息文が発信者本人から受信者本人に届けられ

るまでに介在する人をまとめて取り上げたいと思う。

さて文使い・取り次ぎは発信者・受信者との関係ではだいたい次のように分類できる。

(一) 発信者・受信者の身内

(二) 発信者・受信者の側近・女房・乳母など

(三) 童・女童など

これらについてそれぞれ検討して行きたい。

(一) 発信者・受信者の身内

まず発信者が自分の子(成人)を使いとして遣る場合を考えてみよう。「夕霧の若君」「空蟬の弟小君」「紅梅大納言の若君」「浮舟の弟小君」は(三)の童・女童として扱う。

まず、柏木。藤裏葉巻で内大臣は、夕霧と雲居雁の結婚を許し、藤の花の宴に夕霧を招いた。

四月朔日ごろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて、世の常の色ならず、ただに見過ぐさむこと惜しき盛りなるに、遊びなどしたまひて、暮れゆくほどのいとど色まされるに、頭中将して、御消息あり。(四―282)

これ以前には、花宴巻で右大臣が、やはり自邸で催した藤花宴に源氏を招くために、息子の四位の少将を遣わしている。

弥生の二十余日、右の大殿の弓の結に、上達部、親王たち多くつとへたまひて、やがて藤の宴したまふ。(中略)源氏の

君にも、一日、内裏にて御対面のついでに、聞こえたまひしかど、おはせねば、くちをしう、ものの榮なしとおぼして、御子の四位の少将をたてまつりたまふ。

わが宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし内裏におはするほどにて、上に奏したまふ。(二―58―59)

後者の例は、消息文を持つてきたわけではないようなので、文使いとは言えないが、この両者はいずれも、藤の花宴にことよせて、自分の娘を相手に差し出すことをほめかしている。親の方から申し出るのであるから、正式の婚姻へとつながるものであり、相手を尊重した使者といえるだろう。

また野分巻で、源氏が夕霧を使者として、秋好中宮を見舞わせているのも(四―132)、幻巻で、致仕大臣が紫上を亡くした源氏に弔問の文を書き、息子の藏人少将に持つて行かせたのも(六―12)、自ら赴くのに等しいぐらゐの重さを持つている。

このように自分の成人した息子を使者として遣わすのは、自分の代行をさせているという意味合いが強い。そしてこの場合文使いは、ただ消息文を運ぶだけでなく、その消息文を相手に手渡す段階まで行なう。その意味で夕霧巻、柏木の死後、落葉宮の許へ夕霧が通うようになったことを知った致仕大臣が亡き柏木の立場からも、また夕霧の正妻である雲居雁の立場からも、不快に思っていることを書いて、息子の藏人少将に持つて行かせたことは、落葉宮には大きな圧力となったはずである。

大臣、かかることを聞きたまうて、人笑はれなるやうにおほし嘆く。(中略)この宮に、藏人の少将の君を御使にてたまつりたまふ。

「契りあれや君に心をとどめをきてあはれと思ふうらめしと聞く」

なほえおぼし放たじ」とある御文を、少将持ておはして、ただ入り入りたまふ。(六一―94―95)

藏人少将は、消息文を持ってきただけではなく、自ら邸内へ入つて行く。「入りに入りたまふ」というところに強引な様子が表れている。その上、

時々さぶらふに、かかる御簾の前は、たづきなきこちしはべるを、今よりはよすががあるこちして、常に参るべし。内外などもゆるされぬべき年ごろのしるしあらはればべるこちちなむしはべる(六一―96)

と言ひ残して去る。藏人少将は単なる文使いではなく、致仕大臣の代行として心情を余すところなく表現しているといえよう。それだけに唯一の後見である母、御息所を失つた落葉宮にとつては、より大きな圧力となつたであらう。

(二) 発信者・受信者の側近など

発信者・受信者に仕える人の中には、秋好中宮と朱雀院の間の使いをした「宮の権の亮」(若菜上 五一―36)のように、宮中か

らの消息文の使いとして、公の身分のものが描かれるものがある。そうはいってもこの人物に関して言えば、「宮の権の亮、院の殿上にもさぶらふ」という人物で、院と中宮の双方に仕える人であり、双方の事情に通じている人が使者として選ばれていることが分かる。

このほか惟光のような、源氏のそば近く仕えているものは、主人の忍びの仲において活躍する。惟光は源氏の乳母子の一人で、源氏の忍び歩きの伴をし彼をよく助けている。初出の夕顔巻では「惟光」「惟光の朝臣」「大夫」などと称されているが、梅枝巻では宰相になっている。

若紫巻では源氏が北山で会つた紫上を引き取りたいと、僧と尼上に申し出るが一度は断わられた。帰京後重ねて消息文を出し、願ひ出るがはかばかしい返事を得られず、遂に惟光を北山に向かわせている。

僧都の御返りも同じさまなれば、くちをしくて、二三日ありて、惟光をぞたてまつれたまふ。「少納言の乳母といふ人あべし。尋ねて、くはしう語らへ」などのたまひ知らす。(中略)わざとかう御文あるを、僧都もかしこまりきこえたまふ。少納言に消息して会ひたり。くはしく、おほしのたまふさま、おほかたの御ありさまなど語る。言葉多かる人にて、つきづきしう言ひ続けれど、(一一―21)

落葉巻で、住吉詣でに來た明石君の一行が、源氏の一行に出会

うもの、その華やかな有様にわが身の程を痛感する。後でその事情を聞いた源氏は、かわいそうに思い「いささかなる消息をだにして心なくさめばや、なかなか思ふらむかし」と思う。

堀江のわたりを御覽じて、「今は同じ難波なる」と、御心にもあらでうち誦じたまへるを、御車のもと近き惟光、うけたまはりやしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懐にまうけたる柄短き筆など、御車とどむる所にてたてまつれり。をかしとおぼして、畳紙に、

みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな

とて、たまへれば、かしの心知れる下人してやりけり。

(三一—36—37)

源氏が感慨を催している所に、すかさず携帯用の筆を手渡し、さらにふさわしい使者を選んで、その文を持って行かせるなど、忍びの仲の恋文のやりとりを、住吉詣でという公の場に近い状況下で行わせるのに、十分な配慮であったろう。しかしここで惟光自身が赴くのではない。あくまでも源氏と明石君の関係を公には知られないようにしているのである。

ところで夕霧と雲居雁の間の恋文のやりとりをしていたのは冒頭に挙げた馬の助の他に右近の将監がいる。藤裏葉巻で、夕霧と雲居雁の正式な結婚が成って、後朝の文の使いをする。

御使の禄、なべてならぬさまにて賜へり。中将、をかしきさ

まにもてなしたまふ。常にひき隠しつつ隠るへありきし御使、今日は、面もちなど人々しくふるまふめり。右近の将監なる人の、むつまじうおぼし使ひたまふなりけり。(四—290)

右近の将監程度の人であれば、大臣家の婚姻の正式の使者として扱われうることになろう。

橋姫巻で薫が宇治の姫君らに消息文を贈った時の例を考えてみよう。

御文たてまつりたまふ。懸想だちてもあらず、白き色紙の厚

肥えたるに、筆ひきつくりひ選りて、墨つき見所ありて書き

たまふ。(中略) などぞ、いとすくよかに書きたまへる。左

近の将監なる人御使にて、「かの老人尋ねて、文も取らせよ」

とのたまふ。(六—286—287)

恋文の使いは、正式な結婚の場合でなければ、隨身や童などといった目立たない者を使うことが多い。それを考えると、左近の将監を使いに使ったことで、薫が宇治の姫君らを決しておろそかに扱うつもりでない意志を表していることがわかる。

薫は蜻蛉巻でも、浮舟失踪後、大蔵大夫を浮舟の母のもとへ、弔問の使者として送っている。この人は薫の家司で、浮舟移転の準備もした「かのむつまじき大蔵大夫」(八—133)なのである。これくらいの人を使うには、浮舟に対して誠実な態度をとっていたからであろう。

また「隨身」といわれる人も忍びの仲において活躍する。隨身

は近衛府の舎人で、将曹府生、番長、近衛といった身分のものである。彼らは、消息文を「運ぶ」という役割のみを担わされていることが多い。しかしながら、しばしばたしなみが要求されるものでもある。

夕顔巻、夕顔の扇に書かれた歌に対し、源氏は投紙に筆跡を交えて返事を書き、隨身に持って行かせる。この隨身はそもそも、最初に夕顔の宿を訪れた時、そのたしなみの深い所を表している。

きりかけだつ物に、いと青やかなるかづらの、こちよげにはひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑の眉ひらけたる。

「遠方人にも申す」と、ひとりごちたまふを、御隨身つゝゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ、咲きはべりける」と、申す。

(一一—122)

源氏は身分を隠し、「かの夕顔のしるべせし隨身ばかり、さては、顔むげに知るまじき童一人ばかりぞ、率て」(136)夕顔の許へ通うようになった。夕顔の方は源氏の文使いに尾行をつけるが、まかれてしまう。相手に自分の素姓すら明かさぬようなつき合ひにおいて、文使いにもそれなりの配慮が必要になる。

浮舟巻で、薫の隨身は浮舟への恋文を届けに来て、匂宮の文使いと行き合う。不審に思い、連れていた童に後をつけさせ、文使いが、匂宮邸で式部の少輔(匂宮を浮舟の許へ手引きした者)に文を手渡ししていたことをつきとめる。

かどかどしきものにて、供にある童を、「この男に、さりげなくて目つけよ。左衛門の大夫の家にや入る」と見せければ、「宮に参りて、式部の少輔になむ御文は取らせはべりつる」と言ふ。さまで尋ねむものとも、劣りの下衆は思はず、ことの心をも深う知らざりければ、舎人の人に見あらはされけむぞ、くちをしきや。

(八一—72)

ここでは薫の隨身が的確な判断をして真相をつきとめている。隨身については「枕草子」一九一段に、「すまじきしくてひとり住みする人」の様子として

しろき単のいたうしほみたるを、うちまもりつつ書きはてて、前なる人にもとらせず立ちて、小舎人童、つきつきしき隨身など近う呼びよせて、ささめきとらせて、

(238頁)

と描かれている。隨身が恋文の文使いとして童と同様ある種の趣を持つた物として認識されていることがわかる。

女房や侍女といった人は主として消息文を受け取る女性の側の人として、消息文の取次をすることが多い。彼女たちは男君の消息文をこっそり女君に取り次ぎ、男君を女君の許へ手引きする。また男君の恋文を女君が見ようとしなかったり、返事を書こうとしなかったりすると、恋文を見せ、返事を書くように促し、時には代筆をし、時には女君のすさび書きなどを男君に送ってやったりする。

藤笠や臘月夜のような秘密の仲では、恋文は女房宛に届けられ

中に女君宛のものが同封してある。女房の中には、自身も男君の寵愛を受けている者も多い。

さて女房の中には、自分自身で男君と女君の間を行き来して文を届けるものもある。例えば末摘花の女房、命婦は源氏の乳母子の一人であるが、末摘花巻で、年の暮れ、内裏の宿直所にいる源氏の許へ、末摘花からの消息文と新年の晴れ着を持ってきた。それらが非常識な感覚のもので、持ってくることはためらわれしたが、末摘花の気持ちが無にすることはできない、と告げる。

年も暮れぬ。内裏の宿直所におはしますに、大輔の命婦参り。 (中略) 「かの宮よりはべる御文」とて、取り出でたり。

(中略) 包みに、衣篋の重りに古代なる、うち置きて、おし出でたり。「これを、いかでかは、かたはらいたく思ひたまへざらむ。されど朔日の御よそひとて、わざとはべるるるを、はしたなうはえ返しはべらず。ひとり引き籠めはべらむも、人の御心違ひはべるべければ、御覽せさせてこそは」

(一—275—276)

また右近は玉鬘巻で、源氏からの消息文を自ら玉鬘のところへ持ってくる。そして源氏の言葉伝え、返事を書くよう促す。

御文、みづからまかてて、のたまふさまなど聞こゆ。(中略)

(玉鬘は) 苦しげにおぼしたれど、あるべきさまを、右近聞こえ知らせ、(中略) まづ御返りをと、せめて書かせたてまつる。(三—315—316)

このように直接女房が消息文を運ぶ場合、女性側と直接対面でき、発信者側の意向をよりはつきりと相手に伝えることができる。

桐壺帝の女房、鞍負の命婦が桐壺更衣の母のもとへ、帝からの消息文を携えて訪問した場面を見てみよう。鞍負の命婦は、桐壺帝の命を受け、「野分だちて、にはかに膚寒き夕暮れのほど」(一—19) 桐壺更衣の母のもとへ赴く。桐壺帝は、更衣の母への見舞いに、後宮の女房たちを遣わしており、鞍負の命婦が行く以前に典侍がすでに赴いている。まず鞍負の命婦は帝の仰せ言を告げ、その後消息文を渡す。そして更衣の母から、返書と更衣の形見の品を持って戻ってくる。桐壺更衣の死に対する帝と更衣の母の悲しみが鞍負の命婦を介して通じ合う場面である。

ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。「しばしは夢かとのみたどられしを(中略)」など、はかばかしうものたまはせやらす、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たまつるらむとおぼしつつまぬにしもあらぬ御けしきの心苦しさに、うけたまはり果てぬやうにてなむ、まかではべりぬる」とて、御文たてまつる。(中略) ……など、こまやかに書かせたまへり。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひ果てず。(一—20—22)

帝が悲しみのため、はかばかしく物を言うことができないうる。命婦もそれを最後まで聞けないような状態で、退出する。更衣の

母もまた、帝からの消息文を、最後まで読めない。

そして命婦が宮中に戻ると、帝は「こまやかにありさま聞」(一―26)い、命婦も、「あはれなりつること忍びやかに奏」している。そして帝は更衣の母からの返書を見る。そして次のように述べる。

「故大納言の遺言あやまたず、宮仕への本意深くものしたりしよるこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。いふかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれにおほしやる。「かくても、おのづから若宮など生ひいでたまはば、さるべきついでもありなむ。命長くとこそ思ひ念せめ」などのたまはず。

(一―26―27)

とあるように、帝がその場にいらない更衣の母に直接語りかけているようである。更衣の母は、更衣を亡き大納言の遺言のために宮仕えに出し、身にあまるほどの寵愛を受けたものの、そのために却って横死したような格好になった、と叙負の命婦に述べていたが、帝の述べは、この更衣の母の言葉に対応している。そしてそれは叙負の命婦の中においてはじめて成り立つ。このように叙負の命婦は、帝と更衣の母があたかも直接語り合うように、介在しているのである。

(三) 童・女童など

文使いには童や女童などもよく使われる。発信者が平生そばに

おいて、かわいがっている童が恋文を持って行く場合と、発信者が受信者側の童に消息文をことづける場合とがある。これらの中には発信者・受信者の身内である、空蟬の弟小君、紅梅大納言の若君、浮舟の弟小君がある。

句宮は椎本巻で、初瀬詣での帰り宇治に中宿りをした際に、桜の枝を折って和歌を添えて宇治の姫君らに贈った。

かの宮は、まいてかやすきほどならぬ御身をさへ、所狭くおほさるるを、かかるをりにだにと、忍びかねたまひて、おもしろき花の枝を折らせたまひて、御供にさぶらふ上童のをかしきしてたてまつりたまふ。

(六一310)

句宮は、中君への後朝の文の使いにこの上童を遣わした。

紫苑色の細長一襲に、三重襲の袴して賜ふ。御使苦しげに思ひたれば、包ませて、供なる人になむ贈らせたまふ。ことごとしき御使にもあらず、例たてまつりたまふ上童なり。ことさらに、人けしきもらさじとおぼしければ、昨夜のさかしがりし老人のしわざなりと、ものしくなむ聞こしめしける。

(七一55―56)

このことからわかるように、後朝の文には、しかるべき使いを遣わすべきであり、童は決してそのような使いではない、それがたとえ「をかしき上童」であっても、ということになる。しかるに、いつもの童を遣ったということは句宮が中君をあくまでも忍びの通い所として扱っていることが知られる。これはこの上童が

祿の品を迷惑そうに受け取っていることからわかる。匂宮が正妻として迎えた夕霧の六君の後朝の文の返歌を持って戻ってきた使者が「海人の刈るめづらしき玉藻にかづき埋もれたる」(七一―七五)という有様であったのは対照的である。

受信者のもとに仕えている童に消息文をことづける例としては、胡蝶巻で、柏木が玉鬘への恋文を、玉鬘に仕える「みるこ」という女童にことづけた例がある。柏木からの恋文を見た源氏が、右近に誰からのものかと尋ねると「かれは執念うとどめてまかりにけるにこそ。内の大殿の中將の、このさぶらふみるこそぞ、もとより見知りたまへりける伝へにてはべりける。また見入る人もはべらざりしにこそ」(四―四五)と答えた。みるこの他に「見入るる」人もいなかった、と言いつくしている。女童ゆえわきまえない、ということであろう。

浮舟巻でも浮舟と右近からの、中君への消息文を女童が持つてくる場面がある。

睦月の朔日過ぎたるころ(匂宮が中君の二条院へ)わたり
たまひて、若君の年まさりたまへるを、もてあそびうつくし
みたまふ昼つかた、小さき童、緑の薄様なる包み文の大きや
かなるに、小さき鬘籠を小松につけたる、また、すくすくし
き立文とり添へて、奥なく走り参る。(八一―八五)

「奥なく走り参る」という所に、童ゆえの思慮の足りなさが表れている。この童は、匂宮に「それはいづくよりぞ」と聞かれると、

懐むことなく、簡単に話してしまい、小松や鬘籠の細工がいかにすばらしいか、自慢げに解説までする。

童で忘れてはならないのは空蟬の弟小君である。源氏に頼まれて空蟬に、恋文を持つて行く。空蟬は「かくけしからぬ心ばへは、つかふものか。幼き人のかかること言ひ伝ふるは、いみじく忌むなるものを」(一一―九八―九九)と叱るが、小君も源氏にかわいがつてもらおうと一生懸命である。小君は空蟬の許へ源氏を手引きするが、結局空蟬は逃げてしまい源氏は軒端の萩と一夜を共にした。小君は、源氏が掃邸後、晝紙に手習いのように歌を書いたのを懐にいれ、空蟬に届けた。

その後空蟬は夫に従い、常陸へ下ったが、夫の任果てて上洛する際、石山詣での途中の源氏と逢坂の関で再会した。この時の文使をしたのは、かつての小君、衛門の佐であった。小君は源氏の須磨盤居の際には、常陸に下ったため、昔ほど覚えめでたくはないが、「親しき家人」(三―三―八七)として仕えている。

空蟬が「幼き人のかかること言ひ伝ふるは、いみじく忌むなるものを」といったのは、童は何もわからず簡単に恋文の取次をするから、ということもあるであろうが、「忌む」という強い言葉が使われている。この場面では空蟬が小君をきつく戒めている部分であり感情的になつてもいるのだから、子供を恋文の使いにすることを忌避していたことがわかる。「宇津保物語」においても宮あこ君が、行正からあて宮にあてられた手紙を持つてきた時

返事を拒否するが、「をさなきこにふみをとらせて、ふちせもしらずせめさするは、かしこきわざかな。ま、にくしとてみよ、とすめりかし」(藤はらの君 179頁)といっている。

注

(1) 拙稿「源氏物語の消息文に関する一考察」(人間文化研究年報 第十五号 平成三年三月)、「源氏物語における陸奥紙について」(物語中の消息文に関する研究の一環として)(同第十六号 平成四年三月)。

(2) 「源氏物語」本文の引用は、石田穰一・清水好子校注「源氏物語」一七八(新潮社 日本古典集成 昭和51-60年)により、巻数を漢数字で、頁数を算用数字で示す。

(3) 「枕草子」の引用は、池田亀鑑・岸上慎一・秋山慶校注「枕草子・紫式部日記」(岩波書店 昭和33年)による。

(4) 「宇津保物語」の引用は、宇津保物語研究会編「宇津保物語本文と索引・本文編」(笠間書院 昭和48年)による。

*参考文献 尾崎左水子「源氏の恋文」(求龍堂 昭和59年)「文使いの章」

源氏物語における文使いの一覽(巻数・頁数は日本古典集成本による)

	文使い	発信者	受信者	巻・頁
一	柏木 藏人少将	致仕大臣 落葉宮	夕霧 落葉宮	藤裏葉 四―282
二	惟光 右近の将監 馬の助	源氏 致仕大臣	源氏 致仕大臣	夕霧 六―95 御法 六―121
	左近の将監 大藏大夫 宮の権亮	薫 秋好中宮	藤典侍 宇治大君・中君 浮舟の母	若紫 一―211 若菜上 五―36 蜻蛉 八―113 橘姫 六―287
	左近の中将 大徳 隨身	朱雀院 秋好中宮	朱雀院 秋好中宮	野分 四―142 藤裏葉 四―209
	〃	源氏 明石入道	明石君	若菜上 五―107
	〃	夕霧	夕顔	若菜上 五―165
	〃	薫	雲居雁・藤典侍	夕顔 一―126
	時方の従者	匂宮	浮舟	野分 四―142
	侍の人	六条御息所	源氏	浮舟 八―72 須磨 二―233

